
学 会 記 事

○2008 年秋季大会報告

日本火山学会 2008 年秋季大会が盛岡市の岩手大学工学部で、10 月 10～14 日の日程で実施された。特に、12 日、13 日は快晴となり、会場からは、市街地の北方にせまる岩手山がよく視認できた。

大会初日の 10 月 10 日は 13:00～18:00 に日本火山学会公開シンポジウム「日本の新たな火山防災の仕組み—噴火警報・噴火警戒レベルと噴火時避難体制」が岩手大学工学部一裕会館大会議室で開催された。参加者約 130 名だった。司会は齋藤徳美（岩手大学）土井宣夫（岩手大学）の両氏にお願いし、荒牧重雄（東京大学名誉教授）、池内幸治（内閣府参事官）、岡田 弘（環境防災総合政策研究機構）、小山真人（静岡大学）、北川貞之（気象庁火山対策官）、齋藤徳美（岩手大学）、藤井敏嗣（東京大学地震研究所）の各氏による基調講演が最初に行われた。次に 2007 年 12 月 1 日からレベルの運用が始まっている桜島、浅間山、霧島新燃岳などの運用状況を確認後、総合討論に入った。総合討論は「噴火警報・警戒レベルとその運用（噴火警戒レベルの功罪、防災実務へどう生かす？、判断能力と責任、総合評価）」、「噴火時避難体制の指針とその実現に向けて（避難計画、整備すべき体制、総合評価）」、「新たな火山防災の仕組みを生かすために」の 3 部に分けて講演者と会場が一体となって忌憚のない意見を交換した。その中で噴火警戒レベル値発表のおくれの問題、火山監視体制縮小の中で仕組みを生かす条件、気象庁の人材育成、火山研究者の積極的参加の必要性や行政側からは住民避難の条件の重視、明確なレベル値公表の要望など、多数の意見が出され、予定の 5 時間では足りない状況であった。参加者からは本テーマについて更なる議論の場の設定も要望された。

学術講演会は翌 11 日から 13 日の午前中まで実施され、91 件の口頭発表 70 件のポスター発表が行われた。参加者は 238 名（会員 168 名、学生会員 36 名、非会員 34 名）のほか、参加費無料の学部学生の参加も数名あった。学術講演会プログラムは「火山」第 53 巻 6 号に掲載されている。11 日および 12 日は 2 会場、13 日は 1 会場で口頭発表を行ったが、口頭発表枠に余裕があったこと、ポスター会場が少々狭隘であったため、発表形式に指定がなかった講演については、おもに口頭で発表してもらった。プログラム編成時には注意したつもりであったが、ほぼ同時刻に別々の会場で同種のトピックの発表があ

り、迷惑をかけた。

12 日の夕方の臨時総会終了後、火山学会学会賞記念講演会を開催し、本年度受賞者の荒牧重雄氏に「ある火山学者の例」というタイトルにて講演をいただいた。氏の 60 年におよぶ研究生活とウイットに富んだ話術で聴衆は釘付けになった。

その後、会場を 9 月に新装開店したばかりの岩手大学生協工学部店に移動し、懇親会が開催された。参加者約 120 名であった。地ビールや牛タンやステーキや貝付きホタテの炭火焼きなど、齋藤副学長のご尽力で非常に豪華な懇親会となった。若手奨励賞の 3 名の受賞挨拶のほか、2008 年 12 月で退職されることになった学会事務局の柴田晶子さんに石原会長から記念品が手渡された。また、本大会運営に尽力された林信太郎氏から次回の小田原・箱根大会の実行委員会事務局長の萬年一剛氏に「大会開催の秘伝の書」が手渡された。最後に浜口博之氏（東北大学名誉教授）からお言葉をいただき、閉会となった。

13 日午後は一般公開講座として火山を丸かじり！「キッチン火山実験」が行われた。この企画では日本火山の会の全面的な協力を得た。寿司酢と重曹を使ってマグマの上昇やスパター、溶岩の流下を再現する「寿司酢と重曹を使った溶岩流噴火の実験」、粉碎した麩を自転車チューブからの空気で上昇させ、黒い紙に降下させる「麩による降下火山灰実験」などが行なわれ、小学生を中心とする参加者は熱心に見守ったり自分で実験を行ったりしていた。

14 時からは日本火山学会第 15 回公開講座として「火山学 Q & A in 岩手—火山学者に直接聞いてみよう」が開催された。会場からの質問やインターネットで寄せら



図 1. 岩手山焼走り溶岩流上での現地討論風景

れた質問を伊藤和明氏の司会のもと、壇上の宇井忠英・清水 洋・筒井智樹・土井宣夫の各氏が丁寧に回答した。参加者約 50 名（うち一般参加者約 20 名）であった。前回や前々回の公開講座は 200 名を超える参加者があったが、今回は学校への積極的な PR や動員をかけなかったため、少々寂しい講座となった。また手違いでキッチン火山実験の参加者を誘導できなかったのが失敗であった。

10 月 14 日は日本火山学会現地討論会「岩手火山の噴出物」が実施され、参加者 16 名、案内者 3 名（土井宣夫・伊藤順一・住田達哉）、補助員 1 名（花田類）の計 20 名で岩手山東～北東麓 4 地点をバスで回った。観察地点は 4 地点（岩手山テフラ群、平笠岩屑なだれ堆積物、焼走り溶岩、岩手山完新世テフラ群）で、露頭や火山地形を前に熱心で多様な意見の交換が行われ、バスの中では高密度重力探査の結果について議論がなされた。各地点とも参加者のあまりの熱心さに時間が足りず、案内者が強制的に時間を切って次に移動する場面があるほどで、楽しく有意義な野外討論となった。ご参加の皆様には改めて感謝致します。

（松島 健・土井宣夫・林 信太郎）

2008 年日本火山学会秋季大会実行委員会

大会委員長 齋藤徳美（岩手大学副学長）
 事務局長 越谷 信（岩手大学工学部）
 会計 林信太郎（秋田大学教育文化学部）
 実行委員 土井宣夫（岩手大学自然災害資料活用センター）
 実行委員 土谷信高（岩手大学教育部）
 実行委員 野田 賢（岩手大学工学部）
 実行委員 佐野 剛（岩手大学工学部）
 大会担当理事 松島 健（九州大学理学研究院）

○吉岡島原市長に感謝状を贈呈

2008 年 12 月 17 日に吉岡庭二郎島原市長が勇退されるにあたり、日本火山学会会長名で感謝状が贈呈された。

吉岡市長は、雲仙・普賢岳の火山活動がまだ活発で、火砕流・土石流が頻発していた 1992 年 12 月に初当選。その後 4 期 16 年を勤めあげた。その間、大学や研究機関の火山観測や研究に理解を示して、様々な協力支援を行った。また 2007 年 11 月の第 5 回火山都市国際会議は当学会とともに主催し、大会誘致から大会中のおもてなしまでの大活躍で大会を成功に導いた。

この功績をたたえるため、学会理事会で審議ののち、吉岡島原市長に感謝状を贈呈することとした。



図 2. 感謝状と記念品のヘルメットを贈呈された吉岡島原市長（中央）と、松島健理事（右）、清水洋九大地震火山観測研究センター長（左）

感謝状

島原市長 吉岡庭二郎殿

貴殿は普賢岳噴火中および終息後の長期間にわたり、雲仙火山の観測研究に協力されるとともに、第五回火山都市国際会議島原大会の成功に多大なる貢献をされました。

茲にその功績をたたえ衷心より感謝の意を表します。
 平成 20 年 12 月 17 日

日本火山学会会長 石原和弘

当日は石原会長が所用で贈呈式に参加できなかったため、松島理事が代理で吉岡市長に感謝状を手渡した。同時に九大地震火山観測研究センター長の清水洋教授からも感謝状の贈呈があった記念品には、市長退任後でも島原半島ジオパークのガイドとして活躍していただくことを願って、ジオパークのロゴマークと名前入りのヘルメットを贈呈した。

吉岡市長からは、「雲仙普賢岳平成噴火災害では大変苦労したが、全国の火山研究者の皆さんのおかげでどうにか乗り越えることができた。昨年はその復興の総仕上げとして、日本火山学会と第 5 回火山都市国際会議を開催できてたいへんうれしかった。本来なら島原市から感謝状を出さなければならないぐらいであるので大変恐縮している」との言葉をいただいた。

これまでに日本火山学会で贈呈した感謝状については、きちんとした記録が残っていないため確実ではないが、自治体の首長に感謝状を贈呈したのは初めてと思われる。

（松島 健）